

アメリカ聾教育における トータル・コミュニケーションの展開(6) —— Holcomb, による「トータル・アプローチ」について ——

草 薙 進 郎

1970年代のアメリカ聾教育で急速、広範な発展の直接の契機となったのは、ホルコム(Holcomb)の指導による、カリフォルニア、サンタ・アナ学区の「トータル・アプローチ」または「トータル・コミュニケーション」を標榜した教育実践である。本稿は、この問題を取り上げ、(1) トータル・アプローチの教育理念、教育方法、教育実践、およびその成果は、どのようなものであったか、(2) トータル・アプローチの構成要素である、トータル・コミュニケーションの理念、方法上の特徴は、どんな点にあったのか、を明らかにすることを目的とした。研究の結果、(1) トータル・アプローチとトータル・コミュニケーションの関係、(2) サンタ・アナ学区の聴覚障害児プログラムの経緯、(3) トータル・アプローチの計画、3年間の実践経過などについて明らかにした。さらに、トータル・コミュニケーションの教育的意義について、(1) トータル・コミュニケーションが一般学校のインテグレーション場面で開始され、授業の中で聾児に手話通訳が配置された、(2) 早期から聾幼児に「手話」が導入されたことは、画期的であった、(3) この実践の教育成果が積極的に評価された、(4) 聾者、聾児の親の強力な支持があった、ことなどを考察した。

1 序 言

1970年代における、アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開は、急速、かつ広範なものがある。こうしたトータル・コミュニケーションの発展の直接の契機となったのは、Holcomb, R. の指導による、カリフォルニア州のサンタ・アナ学区の「トータル・アプローチ」または「トータル・コミュニケーション」を標榜した教育実践である。Garretson, M. D. は「1968年、聴覚障害児のためのカリフォルニア、サンタ・アナ学区プログラムの指導主事となったとき、彼は学校理念として、トータル・コミュニケーションを正式に受け入れるのに尽力した。」¹⁾と述べている。

筆者は、先にアメリカ聾教育における、トータル・コミュニケーションの台頭の素地、要因として、「1950年代における手指法の評価」²⁾「1960年代の聾幼児の指文字導入」³⁾「1960年代の手指使用状況とその方法論」⁴⁾「1960年代における口話法の評価と手指使用の主張」⁵⁾の諸問題を取り上げて考察した。1960年代末に台頭した、このサンタ・アナ学区でのトータル・コミュニケーションの実

践は、その後のアメリカ聾教育にきわめて大きな影響を与えた。アメリカ聾教育における、トータル・コミュニケーションの展開を検討していく上で、この Holcomb, R. の指導による、トータル・アプローチ、および、トータル・コミュニケーションの理念とその実際の特徴点を明らかにすることは、研究上きわめて重要な基点となってくる。

本稿は、この Holcomb, R. による、トータル・アプローチ、およびトータル・コミュニケーションを標榜した教育実践を取り上げ、

(1) トータル・アプローチの教育理念、教育方法、教育実践、およびその成果は、どのようなものであったか

(2) トータル・アプローチの構成要素の一つである、トータル・コミュニケーションの理念、方法上の特徴は、どんな点にあったのかを明らかにすることを目的としている。

2 トータル・アプローチの構成要素としてのトータル・コミュニケーション

第一に、Holcomb, R. の提唱した「トータル・アプローチ」と「トータル・コミュニケーション」

の関係を明確にしておく必要がある。彼は、「トータル・アプローチの3年間—1968-71」という論文の中で、この関係を次のように述べている。⁶⁾

「トータル・アプローチを構成する多くの要素として、親、健聴児、地域、特別教育活動、カリキュラム、教師、トータル・コミュニケーションがある。トータル・コミュニケーションは、子どもとの、とくに可能な最早期に、コミュニケーションのすべての方法を用いる。トータル・コミュニケーションは、サンタ・アナ・プログラムで使われているように、聴能訓練、スピーチ、読話、指文字、手話言語から成る。(中略)手話は、読話を強化し、補足するために、口のそばで使われる。トータル・アプローチで活用されるすべてのものは、絶対に必要であり、トータル・コミュニケーションは基本である。」

この記述から、トータル・コミュニケーションは、トータル・アプローチの重要な、基本的な構成要素の一つであることがわかる。サンタ・アナ統一学区の「聾児の教育—トータル・アプローチ」という報告書は、この関係を図1のように表わしている⁷⁾。

図からわかるように、トータル・アプローチの構成要素として、「トータル・コミュニケーション」「研究調査」「地域」「家族」「健聴児」「関連カリキュラム」が挙げられている。これは、先の論文で挙げられたものとほとんど同じものである。注意すべきは、ここでも、トータル・アプローチの中核的な構成要素として、トータル・コミュニケーションが位置づけられていることである。このトータル・コミュニケーションの構成要素として、同じく「スピーチ」「手話言語」「読話」「聴能訓練」「指文字」が挙げられている。これは、「あらゆるコミュニケーション手段を用いて、聾児とコミュニケーションせよ」という彼の主張を裏付けるものである。

3. サンタ・アナ学区の聴覚障害児プログラムの経緯

サンタ・アナ統一学区の先の報告書は、同学区の聴覚障害児プログラムの発展について、次のように述べている。

「聴覚障害児のサンタ・アナ・プログラムは、

オレンジ郡において最も古い、この種のプログラムである。それは、15の学区、そのほとんどは、オレンジ郡南部、からの3歳から12歳までの子を援助している。このプログラムの最初の教師は、フィツジェラルド姉妹である。その一人は、他所で、フィツジェラルド・キィを創案した。サンタ・アナ・プログラムは、口話プログラムとして、1948年に開設された。1968年にトータル・アプローチに変更されるまで、完全に口話手段による教育を目指した。」⁸⁾

「このプログラムがスタートしたときには、当初、高度難聴児もクラスにいたが、1959年には、プログラムは、聾児のみのクラスに変更した。サンタ・アナ学区は、このプログラムを、Franklin校で開設したが、1961年に、それを、James Madison校へ移行した。このプログラムは常に、地方教育委員会の管理の下にあった。」⁹⁾

このように、聴覚障害児プログラムは当初、「口話プログラム」として、1948年に開始されている点に注目したい。前述の経過の中で Holcomb, R. が、1968年9月より、サンタ・アナ学区の指導主事に就任し、新しい教育計画として、トータル・アプローチの教育実践を開始した。この間の事情について、先の報告書は、さらに次のように述べている。

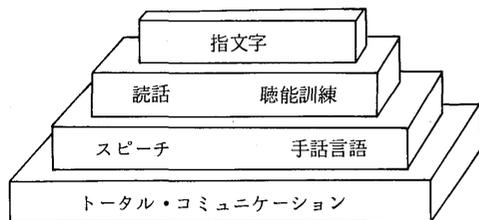
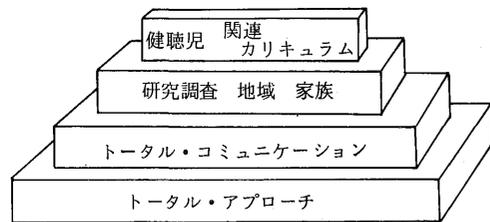


図1 トータル・アプローチとトータル・コミュニケーションの関係

「1968年の夏期、サンタ・アナ統一学区は、聴覚障害児プログラムの指導主事として、新しい地位を設けた。この地位は、Holcomb, R. に提供された。その時、彼は、カリフォルニア、ノースリッジのサンフェルナンド・バーレー州立大学の『聾分野の指導者養成プログラム』のメンバーであった。彼自身、聾である、Holcomb氏は、聾者のための、すべてのコミュニケーション手段を、強力に主張する者であった。最も広く引用される、彼の二つの言は、『可能なあらゆる方法で、聾児とコミュニケーションせよ。もし必要ならば、逆立ちもせよ』、そして、聾者は『何よりも大切なものを、それから、いくつかのもの』を必要とする、である。」¹⁰⁾

今みてきたように、サンタ・アナ学区の聴覚障害児プログラムは、当初、口話プログラムとしてスタートし、最初の教師が、口話法の言語指導で著名な、フィツジェラルド姉妹であったことは特徴的である。そして、1968年9月より新設された指導主事の地位に、Holcomb, R. が就任、自分の構想していた聾児のためのコミュニケーション計画を同学区において具体化していった。彼の教育方針は、同プログラムを口話から、トータル・コミュニケーションへと変換させたが、この実践は、その後アメリカ聾教育に、きわめて大きな影響を与えることになった。

4 トータル・アプローチの実践

(1) トータル・アプローチの計画¹¹⁾

Holcomb, R. は、トータル・アプローチ、またはトータル・コミュニケーションという用語を、スーパー・マーケットの“トータル・ディスカウント”(全面割引)という宣伝スローガンからヒントを得て、命名したと述べている。すでに、彼は1967年に、インデアナポリスのインデアナ聾学校の教師である間に、このトータル・アプローチの計画を書き上げた。彼は、この計画をサンタ・アナ学区で実施する前に、Jones, L. 博士、および Johns, L. 博士(両者とも、1968年、サンフェルナンド・バーレー州立大学の指導者養成プログラムの教師)と討論している。彼は、同大学の指導者養成プログラムに在学し、「管理とスーパービジョン」で、修士号を取得している。

(2) James Madison 校でのプログラムの概要¹²⁾

Holcomb, R. が就任した、1968年秋に、トータル・アプローチの実践の場となった、James Madison 校には、聾児が6学級で34人、健聴児は800人以上が在学していた。多くの聾児は、一つ以上の知的教科で、一般学級にインテグレートしている。そのほか、美術、体育、休憩時、昼食においても、インテグレートしている。聴覚障害児担当として、指導主事1名(Holcomb, R.)のほか、6人の教師、3人の助手、非常勤の言語治療士1名、代替教師(週1回)、臨時の代替教師2名が配置されている。このほか、2人のボランティアがおり、その一人は、スペイン語クラスにインテグレートしている、聾児のために、毎日通訳をしている。

このプログラムへの就学は、入学・退学委員会(指導主事、特殊プログラムの主任、心理学者、健康相談員、スピーチ相談員で構成)が月1回会合を開いて決めている。

(3) トータル・アプローチの実践経過¹³⁾

トータル・アプローチの実践について、アンタ・アナ統一学区の報告書「聾児の教育」(1971)とHolcomb, R. による「トータル・アプローチの3年—1968~71」(1972)から引用しつつ、次に要約してみる。(この両論文は、ほとんど全じ内容である。)

① 第1年目の活動

両親と教師の全員は、学校が始まる以前にトータル・アプローチは、聴覚障害プログラムのすべての子と、学級にとって新しい教育方法であると説明された。2人の新しい教師は(両者とも、すでに、トータル・コミュニケーションに慣れていたが)学校の始まる以前に、他の教師たちを教育した。トータル・コミュニケーションのクラスが、直ちに広く両親、健聴児、地域の人々のために設けられた。プログラムのすべての子のスピーチが、最初にテープに録音された。子どもには、種々のアチーブメントなどの検査が実施され、評価された。検査は、過去3年間以上継続されてきた。

② 3年間の活動経過

最初の3年間は、トータル・アプローチに関係した各人にとって、多忙な年であった。また、この年月は、最も激動の年月であった。次に、この

3年間の多くの活動の中から若干を挙げてみる。

a 11人の聾者の代表が、1968～69学年度にサンタ・アナ聾者協会 (Guild) の最初の会合を開催した。これは、サンタ・アナ学区で、聾教育に聾者が関与した、一里塚である。

b 1968年に、二つのテレタイプが設置された。一つは、聾児学級にもう一つは、健聴児学級に設けられた。

c 教科外活動は、地域のボランティアによって援助された。地域が援助した活動は、バレエ、図工、体育、インディアン・ガイドである。

d 通訳サービスののあるインテグレーションが、通常の健聴児クラスへ行く、幼児、小学生のために提供された。すべてのプログラム、映画、テレビのプログラムが、すべての子のために通訳された。

e サンタ・アナ聾者協会は、二つの有効性を示した。1年目に、約1000人が、2年目には、約2000人が来校した。

f 就学前と幼稚部の子のための毎日のレッスンが、手話言語で家に送られる。その結果、両親は子どものスピーチを理解できなかった時でも、子どもの学習を強化することができた。

g トータル・アプローチに関するワーク・ショップが、同様のことを望んでいる他の学校の者のために後援された。

③ トータル・コミュニケーションの実際

トータル・コミュニケーションは、トータル・アプローチの中核である。ここで、Holcomb, R. の提唱した、トータル・コミュニケーションの特徴とその実際について検討したい。

Holcomb, R. のトータル・コミュニケーションの提唱の最も重要な点は、前述の「可能なあらゆる方法で、聾児とコミュニケーションせよ」という点にある。そして、「聾児が十分な発達可能性を実現する機会を持つべきであれば、健聴児が聞くことを、聾児は見なければならぬ。」という主張にもみられる。トータル・コミュニケーションの方法において、とくに、革新的な点は、手話言語の幼児段階、小学部段階への導入にある。

トータル・コミュニケーションの実際について、次のように、紹介、説明されている。

「現在の方法は、聾教育での全く新しいアプローチへ転換した。このアプローチは、トータル・ア

プローチと呼ばれる。このアプローチでは、聾児は、いつも、スピーチ、読話、聴能にさらされる。しかし、多くの聾児は、読話は不十分で、読話されるスピーチ、または言語のパーセンテージが非常に制約されているので、指文字と手話言語を含む、他のコミュニケーション手段が利用される。コミュニケーションは、目的に対して手段であり、それ自身、目的ではないと考えられる。コミュニケーションが制約される時、学習の機会がまた制約されると理解される。さらに、もし、聾児が早期に遅滞すれば、彼が追いつくのは、きわめてまれである。コミュニケーションのすべての方法の使用は、聾児のサンタ・アナ・プログラムで使用されているように、『トータル・アプローチ』の基礎である。簡単に言えば、これは、聾児に彼らが現在使えるコミュニケーションを用意することを意味する。

トータル・アプローチで、見逃されてはならないことは、聾児と同じく健聴児である。学年度の初めには、両グループとも、手話言語、または、指文字を知らなかった。健聴児は、スピーチを持つ一方、聾児は少数の例外を除いて、コミュニケーション手段を持たない。他のことばで言えば、聾児は、手話言語を禁止されていた。聾児のきわめて少数しか、口話で会話ができない。コミュニケーションは、学習の基本であることがわかったので、1968年の学年度当初にこれが、直ちに変更された。聾児のスピーチを補助するために、指文字と手話言語が教えられたのみならず、健聴児もまた、この方法を学ぶ機会をもった。」

この Holcomb, R. の主張と実践は、1970年代のトータル・コミュニケーションの発展の基礎となったものである。口話に加えて、手話、指文字を導入することによって、コミュニケーションを成立させる。このコミュニケーションの成立が、学習成立の基本であり、そのことによって、聾児の学習の機会が拡大されるという主張は、当時としては、まだ聾教育の中で広く受け入れられていなかったものだが、それは、すべて彼の独創的な発想であったとはいえない。しかし、自分の主張を教育計画として構想し、サンタ・アナ学区のインテグレーション場面の中で、実際に実践化したことに、大きな意義があったと考えられる。それ故に、1970年代のトータル・コミュニケーション

の発展の主要な礎石となったと言えよう。

④ インテグレーションへの影響

こうした、トータル・コミュニケーションは、多くの点で、インテグレーションに好影響を及ぼしている。インテグレーション計画の実際を観察した結果、次の点が顕著であったと指摘されている。

a 有能な口話スキルを持つ聾児と同様、制約された口話能力をもつ、聾児も、一般学級の中にインテグレートできる。

b 聾児は、健聴児とより自由にコミュニケーションできるし、また逆もそうである。聾児の間で、スピーチが多くなった。なぜなら、聾児は、健聴児がすべてのコミュニケーション手段を用いて、本当にコミュニケーションをしたく、また、友達でいたいという態度を示しているのです、彼らと話すことを恐れないから。

c インテグレーションが教室外の多くの活動に広がるので、聾と聞こえの世界の間の、真のインテグレーションへの、大きなステップが生起する。

⑤ トータル・アプローチの評価

トータル・アプローチの3年間の実践成果について、担当教師、親、健聴児、聾児、校長のそれぞれの立場から評価が行われている。聾児に関しては、検査と観察の結果、学習、コミュニケーション、言語能力、興味、インテグレーション、心理・行動面などにおいて、改善、向上がみられたと評価している。教師の場合は、学級経営、指導法、カリキュラムなどで、好ましい影響が表われたとし、親、健聴児の態度は好意的であったと評価している。(表1参照)

⑥ トータル・アプローチの問題と結論

口話プログラムから、トータル・アプローチへの変化で生じた問題点と、その解決策について、次の事項が挙げられている。

a 最初の問題は、過去において聞いたことの多くは、誤解をもたらしていると、両親を確信させることであった。この分野に存在する研究と同じく、成人聾者に親を会わせることが、両親があるがままに、聾を理解するのに著しく役に立つ。

b 第2の問題は、トータル・コミュニケーションを学ぶ機会を両親に提供することである。クラスが、火曜日の夕方、両親のために設けられた。

手話言語の本が、学校図書館に購入された。手話言語の幼児のレッスンは、毎日家に送られた。研修会が、トータル・コミュニケーションについてもっと知りたい親に対して設けられた。

c 第3の問題は、トータル・アプローチのために、この地区に移ってくる多くの子の世話である。現在、我々は4つのクラスの入っている一つの部屋をもっている。幸いにも、新しい学校が建設中で、将来、学区のすべての子を十分にサービスできるようにする。

d 第4の問題は、聾児と健聴児が可能な最善のマナーで、お互いに生活していくことを助長することである。両方法でのインテグレーション、すなわち、聾児が健聴児へと、その逆のインテグレーションを促進した。トータル・コミュニケーションのクラスは、両グループが、お互いに、いろいろな方法で生活し、理解することを助長した。

e 第5の問題は、来校する多くのプログラムの見学者が、クラスを邪魔しすぎないように、いかに扱うかである。この問題は、まだ解決されない。しかし、我々の新しい学校は、一方からのみ見える窓を設けることを希望している。

この実践の結論として、次のように述べられている。

この国の大多数の聾者は、有効な、すべての手段によって、聾児を教育すること、すなわち、トータル・コミュニケーションを、長い間、確信してきた。サンタ・アナ学区での3年間のトータル・アプローチの評価のうち、我々は、結果がた

表1 1968~71年の学力検査の結果

児童	年齢 (1971)	1968	1969	1970	1971
A	12	1.5	1.6	3.6	3.9
B	12	3.2	3.7	3.9	5.0
C	9	...	1.1	1.4	1.9
D	9	...	1.1	1.4	2.0
E	13	1.7	1.8	3.4	3.4
F	12	3.5	3.6	4.0	5.2
G	12	1.7	1.8	3.7	3.9
H	9	...	1.4	2.3	4.3
I	8	1.9	3.1
J	11	4.4	4.8	5.6	6.5

註(1) 数値は学年レベルを表わす

(2) 全員先天性全聾で知能は正常範囲

いへん印象的であることを見出した。すべての証拠は、トータル・アプローチで初めから、出発した子どもたちは、数年のうちでさえ、進歩が、より良好であることを示している。

5 トータル・コミュニケーションの 教育的意義

アメリカ聾教育における、Holcomb, R. の「トータル・アプローチ」または「トータル・コミュニケーション」を標榜した教育実践の開始は、画期的なものであったと言える。

しかし、この計画の立案から実践化に当って、それ以前の聾教育の動向が、大きく影響したことは否定できないが、彼の指導した教育実践は、いくつかの点で特徴的である。次に、トータル・コミュニケーションによる実践の、教育的意義について、若干検討したい。

(1) Holcomb, R. 自身聾者であり、テキサス聾学校の卒業生である。ギャロデット大学を初め、いくつかの大学で学び、聾学校の教師の職についている。サンタ・アナ学区に来る前には、インデアナ聾学校の教師をやっていた。また、彼は、二人の聾児の父親であった。こうした個人的な経歴が、彼の「トータル・アプローチ」とくに、「トータル・コミュニケーション」の教育理念、教育計画の素地となっていたことは確実である。

(2) Holcomb, R. は、カリフォルニアのサンフェルナンド、パーレー州立大学（現在の州立大学ノースリッジ校）の聾分野の指導者養成プログラムにおいて、「トータル・アプローチ」の計画について、Jones, L. 博士らと討論している。彼がサンタ・アナ学区の指導主事の地位を得たことが、トータル・コミュニケーションの実施に大きく貢献したことは明らかである。また、その実践化に当っては、学区の教育委員会の理解と強力なバックアップがあったわけで、このことが、この実践を成功に導く、一つの要因になったと思われる。

(3) トータル・アプローチが、聾学校ではなく、一般学校のインテグレーション場面の中で開始されたことは特徴的である。インテグレーションと口話教育は、歴史的には、密接な関連をもってきた。サンタ・アナ学区のプログラムは、当初口話プログラムであり、マジソン校の在学児は、聾児であったことに注目したい。こうしたことが

ら、彼の指導した実践は、インテグレーション場面に、手指法を、トータル・コミュニケーションという形で、初めて、導入したことに、重要な意義を有する。

そして、関係する教師はもちろん、健聴児にも、手話、指文字を教え、聾児とトータル・コミュニケーションで意思の伝達を成立させたことが特徴的である。サンタ・アナ学区のこの実践は、健聴児に手指コミュニケーションを教えた最初の公立学校プログラムと言える。健聴児の反応も、きわめて良好であったことは、このプログラムを成功に導いた一要因である。

(4) インテグレーションの学習場面での手話通訳の介在は、量的、質的にどの程度のものか明確ではないが、小学校段階では全く新しい試みであったことは事実である。大学レベルでは、1964年より、先のサンフェルナンド、パーレー州立大学（ノースリッジ校）にて、聴覚障害学生のために、授業場面で、手話通訳サービスを実施している。

(5) さらに、重要なことは、聾幼児への「手話」の導入である。聾幼児への指文字導入の実践は、すでに、1959年開始のニューメキシコ聾学校以来、ルイジアナ聾学校など、いくつかの聾学校で実践が進展していたが、学校教育場面での聾幼児への手話の意図的導入は、このトータル・コミュニケーションの実践が、最初であり、この点で画期的なことであったと評価される。こうした「幼児、小学校低学年レベルも含めた、手話の利用」は、長い間、聾教育では否定され続けてきた内容であった。この実践が、翌1969年のメリーランド州立聾学校（フレデリック）における、トータル・コミュニケーションによる実践開始の、重要な端緒をもたらすことになった。

(6) このプログラムの実施において、聾者および聾児の親の協力、参加を無視するわけにはいかない。とくに、サンタ・アナ聾者協会は同学区における「聾教育に聾者が関与した一里塚」であった。また、親の団体の援助について、Schowe, B. M. (1970) は、次のように述べている¹⁴⁾。

「1960年代の親の団体の成立と発展は、聾児の学習を援助する問題への深い理解をもたらしつつある。Holcomb, R. が指導している、サンタ・アナ学区の実験が、その適例である。これは、親の

団体の強力な支持なしには、準備するのは不可能であった。」

「1969年のパークレーのアメリカ聾教育者会議の開催中に、最初の正式な会が催され、創設された全米の親の団体がある。6000名以上のメンバーを公言している。Holcomb, R.氏は、この団体の設立に尽力した。過去、彼は、インディアナ聾学校の両親グループの中心人物の一人であった。」

このように、トータル・コミュニケーションの台頭、展開において、聾者および、聾児と健聴児の親、地域社会、ボランティア活動の果たした協力と役割は、無視できない。そして、トータル・アプローチの成果についての、聾児、健聴児両方の両親の肯定的な反応が、この実践の評価として重要であったと言える。

(7) 「すべてのコミュニケーション手段を用いて、聾児とコミュニケーションせよ」という主張は、Holcomb, R.の計画の中核であった。従来、口話法の側から、手話言語の早期導入は、聾幼児の口話能力を妨害、低下させ、それは、学力へも悪影響を及ぼすと主張されてきた。この口話主義者の主張は、それまでに次第に、批判されつつあったが、Holcomb, R.の実践は、このことに対して、実践をもとに反証を示したとも言える。彼の「トータル・コミュニケーションの三年間」における、学力、言語能力などでの成果は、独自のもので他に比較するものがなく、どこまでがトータル・コミュニケーションの成果といえるか、明確に決め難いが、全体の検査結果、観察結果が、向上を示したことの意義は大きなものがある。

(8) トータル・アプローチは、いくつかの要素から構成された教育理念、教育方法であるが、その中のトータル・コミュニケーションのみが、なぜ、後に、聾学校教育の中に急速に受け入れられ、発展していったのかという疑問が生じる。その解答の一つは、それまでの経過の中で、聾学校の中に、指文字、手話を受け入れる土壌が、醸成されていたのであり、まさに、トータル・コミュニケーションの台頭は、こうした動向に大きな「契機」をもたらしたと考えられる。もう一つの点は、トータル・アプローチの構成要素の中で、トータル・コミュニケーションを除いた要素、すなわち、親、健聴児、地域、特別教育活動、カリキュラム、教師などは、従来も追求されてきた内容であり、

とり立てて注目すべきことではなかったが、トータル・コミュニケーションは、新しき教育概念であったことが指摘できる。

(9) アメリカ聾教育の長い歴史の中で、手話・口話論争として、本格的な解決、結着をみないできた問題が、トータル・コミュニケーションという形で、口話と手指が結合できるという、Holcomb, R.の計画とその実践は、まさに、当時の聾学校教師と聾教育関係者に、大きな影響を与えたものといえる。当初、統合教育場面で始まったこの実践は、1970年代に入って、むしろ聾学校教育の中で、急速、急激に展開していった。こうした画期的な変革の生起は、それ以前の聾教育者のだれもが、予測できなかったことだと言われている。一方、Holcomb, R.の統合教育での計画そのものは、さらに、彼の指導のもと、「Holcombプラン」(1977)として、受け継がれていった¹⁵⁾。

さて、本稿においては、Holcomb, R.の指導した、サンタ・アナ学区でのトータル・コミュニケーション、およびトータル・アプローチの実践について、分析、考察した。次の作業として、このトータル・コミュニケーションの直接的影響を受けた、メリーランド聾学校の実践の特徴について、検討していきたいと考えている。

文 献

- 1) Garretson, M. D. (1976) : Total Communication. In Frisina, R. (ed) A Bicentennial Monograph on Hearing Impairment. Volta Rev., 78, p. 89.
- 2) 草薙進郎 (1981) : アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開(3). 心身障害学研究 5 (1) pp. 37-46.
- 3) 同上 (1982) : 同上 (4) 同上 6 (1) pp. 1-9.
- 4) 同上 (1983) : 同上 (5) 同上 7 (1) pp. 1-10.
- 5) 同上 (1983) : アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの展開. 特殊教育研究 20 (4), pp. 9-17.
- 6) Holcomb, R. K. (1972) : Three Years of the Total Approach — 1968-71. Report of the Proceedings of the 45th Meeting of the Convention of American Instructors of the Deaf.

- 7) Santa Ana Unified School District. (1971) : pp. 523-524.
Educating Deaf Children ; The Total Approach. p. ii .
- 8) 7) p. 9.
- 9) Santa Ana Unified School District Program for the Deaf. (1969) Deaf American, Apr. p. 9.
- 10) 7) pp. 4-5.
- 11) 6) p. 524.
- 12) 9) p. 9.
- 13) 6) pp. 524-530. ; 9) pp: 10-11.
- 14) Schowe, B. M. (1970) : Education of the Deaf in the Sixties. A Description and Critique. Ohio State Univ. pp. 305-307.
- 15) Vernon, M. & Athey, J. (1977) : The Holcomb Plan. Instructor. Jan. pp. 136-137.

Summary

Development of Total Communication in the Education of the Deaf in U.S.A. (6)

—On “Total Approach” by Holcomb, R.—

Shinro Kusanagi

Holcomb, R. supervised the education of the deaf children in Santa Ana School District from 1968 as a supervisor. The problem for the deaf children at Santa Ana was termed “Total Approach” or “Total Communication” as a school philosophy. It is well-known that this practice influenced very strongly the education of the deaf children, especially communication method, in U.S.A. during 1970's.

The author previously examined the factors which influenced the origin and development of total communication. The purpose of this paper is to clarify the issues of (1) educational philosophy, method, practice and its effect of “Total Approach”, (2) educational philosophy and its characteristics of method in “Total Communication”.

The results studied are as follows:

- (1) They were examined ① relationship between total approach and total communication, ② history of the program for the deaf in Santa Ana School District, ③ plan and practice of the program during 1968–1971.
- (2) They were discussed ① total communication was initiated in the educational situation, that is, “integration setting”, ② total communication brought about the revolution in the communication method in the education of young deaf children, ③ results of the practice were positively evaluated by many persons concerned and tests, ④ total communication was strongly supported by deaf persons and parents of the deaf children.